Ⅳ-110

個人の持つイメージ再編のプロセスに関する分析手法の提案
ー将来都市イメージの形成をケーススタディとしてー

（株）福山コンサルタント　正会員　伊藤将司
同　上　　正会員　柴田貴徳

1．本研究の枠組みと本稿の目的

人間は、きわめて高い潜在的能力を持つことはよく知られたところである。通常の場合、合意形成や計画参加などの概念は、人間の顕在化した能力によって、お互いに意見の調整を行い、ある一定の妥協点を探るという行為を示す。しかしながら、個々人が「望ましい」と感じる「都市のあり様」は、どちらかと言えば、個々人の生理に近い感覚であるため、決して顕在化した能力によって示される理論的・言語的手段で、明確にされ得るものではない。したがって、お互いの「感じのいい都市」を目指していくまちづくりにおいては、潜在的能力の助けを借りた、イメージの共有化を進めることが必要となるのではないか、と筆者らは考えている。

さらに、潜在的能力は、イメージされた事柄を実現していくシステムであるため、ひとつの市民集団が潜在意識レベルで、ある「感じのいい都市」のイメージを共有化し得たとした場合、個々人の顕在意識の動向と無関係に、その共有化されたイメージの実現に向けて、集団としての潜在能力が働くのではないか、と考えられるのである。

このようなイメージの共有化が行われる場合、その前段において、個々人の中でイメージの再編が行われるはずであり、このプロセスを明らかにすることによって、合意形成に必要な要素を把握できるものと考えられる。

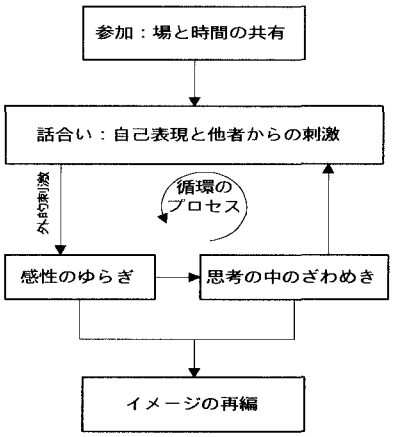
そこで本稿では、群馬県新田町の都市マスタープラン策定時に、筆者らが作業部会で携わった、将来都市イメージの形成をケーススタディとして取り上げ、個々人の持っているイメージがどのように再編されていくのかというプロセスを、明らかにしていくものとしたい。

キーワード：イメージ再編、合意形成、市民参加
〒136　東京都江東区亀戸 2-25-14
〒802　北九州氏小倉北区片野新町 1-11-4

2．イメージ再編のプロセス

市民参加等の計画参加が行われる場合、その行為によって、場と時間を共有する。そして、そこで開催される話し合いやワークショップ等を通じて、各個人は自己表現を行うとともに、他者の発言や提供された資料等により、外的な刺激を受ける。その外的な刺激に対して、「気になる一言」「何かピンと来た」と言った直感的な感性のゆらぎが起こる。そしてそれが思考のざわめきを導き、論理的になぜそのことに刺激を受けたのかという自問自答を通じて自己のゆらぎを論理的に考え、そして、それを言葉や図などで表現する。

このように、イメージが再編されるプロセスとは、外的刺激が感性のゆらぎ（直感的）を起こし、それが思考のざわめき（論理的）を導き、そして外部へ表現され、それが新たな外的刺激となって他者へ影響を与えるという循環のプロセスを繰り返しながら、最終的に個人の最初に持っていたあるイメージが再編され、第３のイメージに変化するものであると考えられる（図－１）。



図－１　イメージ再編のプロセス

TEL：03-3683-0151　　FAX：03-3683-0196
TEL：093-931-3105　　FAX：093-951-8660

３．イメージ再編プロセスの分析手法の提案

上述するイメージ再編のプロセスを把握するための分析手法について、都市マスタープランの策定における将来都市イメージの形成を例に上げながら提案する。

まず、計画参加等の場の初回に、各個人に「こんなまちにしたいな」とか「ここを一番大切に考えたいな」という、漠然とした将来の都市イメージを聞く。そして、当該事項について、何度かの検討を重ねていき、最終回にもう一度同じような質問を行い、外的刺激を受けた後の、将来都市イメージを把握する。この初回と最終回の将来都市イメージの変化を比較することにより、イメージ再編の有無を把握することができる（表－１）。また、再編しやすい事項､再編が全く起こらない事項等を整理し､個々人の思い入れの強さ等の要因を考慮しながら、普遍的に再編しやすい事項についての考察を行う。

つぎに、イメージ再編の構造を明らかにするために、もっとも印象に残っている言葉や表現等を把握し、感性のゆらぎを起こした言葉をキーワードとして整理する。感性のゆらぎを受けた後、その個人がどのような発言を行っているのかを議事録等より把握し、そのキーワードがどのように表現されているのかを分析し、論理的な思考のざわめきについての考察を行う。

これらの手法を用いて分析を加えることにより、外的刺激から、感性のゆらぎ、思考のざわめきまでのプロセスが実証できるものと考えられる。

表－１イメージ再編の有無の把握の例

	初回イメージ	変化	最終イメージ
Ａ氏	田園の広がり	あり	森の再生
Ｂ氏	工場の誘致	あり	地場産業活性
Ｃ氏	森の再生	なし	森の再生
Ｄ氏	住宅の増加	あり	田園の保全
等			

４．ケーススタディ

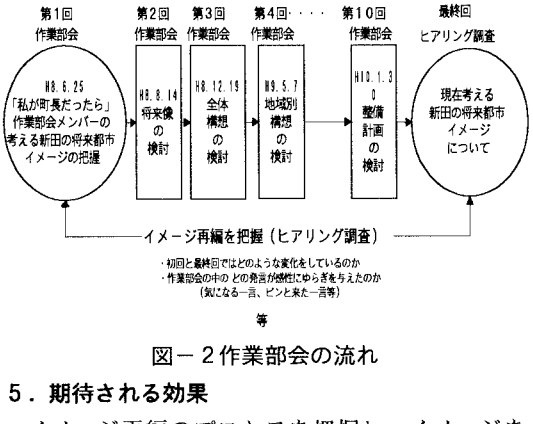
ケーススタディとして、群馬県新田町の都市マスタープラン策定業務の中で組織された、作業部会での将来都市イメージの形成を取り上げる。

新田町都市マスタープランは、平成７年度から約３年間をかけて策定中である。作業部会は庁内公募等で参集した役場の職員１４名で構成され、町の将来について、いろいろなアイディアを出し、都市マスタープランのたたき台を作成していく場として位置づけられている。

初回の作業部会では、メンバー全員に「わたしが町長だったら」というテーマで、１人１人に個々人の将来都市イメージについて発言をしてもらい、お互いに各個人の抱いているイメージを確認し合っている。その後、全体構想や地域別構想等、都市マスタープランの内容の構成に従って１０回作業部会を開催し、内容の検討は概ね終了している。

最終回として、上述する視点に沿って、メンバーにヒアリング調査を行い、イメージ再編のプロセスを把握する予定である（図－２）。

なお、業務進捗の都合上、ヒアリング調査が遅れており、ケーススタディの結果については学会の席上発表したい。



図－２作業部会の流れ

５．期待される効果

イメージ再編のプロセスを把握し、イメージを再編させた要因やイメージが再編しやすい事項等がある程度把握でき、普遍的な整理ができるならば、市民の計画参加等で、合意が図られないある硬直した場合においても、個々人のイメージの再編しやすい状況を作り出すことによって、対立している状況を変化させ、合意に至る可能性を見いだすことができるものと考えられる。

６．今後の研究方針

イメージ再編のプロセスが実証でき、ある程度普遍的な整理ができたならば、それを実際の住民参加の場に活用し、その効果を検証することが必要だと考えている。また今後は、個人レベルのイメージ再編を発展させ、集団におけるイメージ共有化手法について、さらに研究を進めたいと考えている。

（参考文献）

カオスの時代の合意学　合意形成研究会　創文社